

学位論文審査の要旨

論文提出者	瀧谷 佳晃
論文審査委員	(主査) 朝日大学歯学部 教授 吉田 隆一 (副査) 朝日大学歯学部 教授 勝又 明敏 (副査) 朝日大学歯学部 教授 堀田 正人
論文題目	光学機器を用いた根管口モデルにおける根管口探索の評価
論文審査の要旨	<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>本論文は、大白歯の歯髓腔を模した「根管口モデル」を開発し、肉眼および光学機器を用いた根管口探索の精度を客観的に評価する方法を検討したものである。根管治療を正確に行ううえで、根管口の探索と明示は歯内治療における最も重要な過程のひとつである。しかし臨床現場においては、根管数の多い大白歯の根管口を肉眼で正確に観察するのが困難なことも多い。口腔内は狭い空間であり直視での観察には自ずと限界がある。近年、これまでに光学機器を用いた歯内治療の経験がない歯科医師も、歯科用顕微鏡あるいはルーペなどの光学機器を用いて根管口を探索することが多くなった。また、デジタル技術の進歩により、画面上で口腔内の拡大像を観察する「デジタル拡大鏡」と呼ぶべき診療機器も登場しているという。</p> <p>本研究では、根管口モデルは根管口数と髓床底深さの組み合わせが異なる6パターンを作製し、口腔ケアモデルに付属する模擬下顎総義歯の大白歯の人工歯を削合し、根管口モデルが左右、近遠心方向に着脱できて交換可能となるようにしている。根管口探索実験で各観察者が根管口モデルを左右、近遠心に交換することで正解が同じにならないように用いたこれらの手法は評価できる。</p> <p>デジタル拡大鏡には歯科用顕微鏡のような接眼レンズがなく、移動可能なアームを搭載した観察モニターを観察者が見やすい位置に設定可能なため、歯髓腔内の観察が容易である。このため、臨床経験の少ない観察者を対象とした本研究では、肉眼や歯科用顕微鏡よりも高い根管口探索精度が得られたと考察している。根管口モデルを用いた本研究の提案手法は、観察に用いる光学機器の評価に加えて、観察者の根管口探索能力を客観的に評価することを通じて歯科臨床教育の有効なツールになることを見出した。</p> <p>大白歯の歯髓腔を模した「根管口モデル」を用い、光学機器を用いた根管治療の経験がない歯科医師が肉眼、デジタル拡大鏡、および歯科用顕微鏡を用いて根管口を探索した精度を検討した結果、根管口探索の精度はデジタル拡大鏡が最も高く、次いで肉眼、歯科用顕微鏡の順位であったこと、また、歯科用顕微鏡は観察者間のスコアのばらつきが大きいこと、および根管口数と髓床底深さにより根管口探索精度が変化することを明らかにした。</p> <p>これらの結果から審査委員は本論文の内容を評価し、学位授与に値するものと判定した。</p>